

つづら
葛籠城

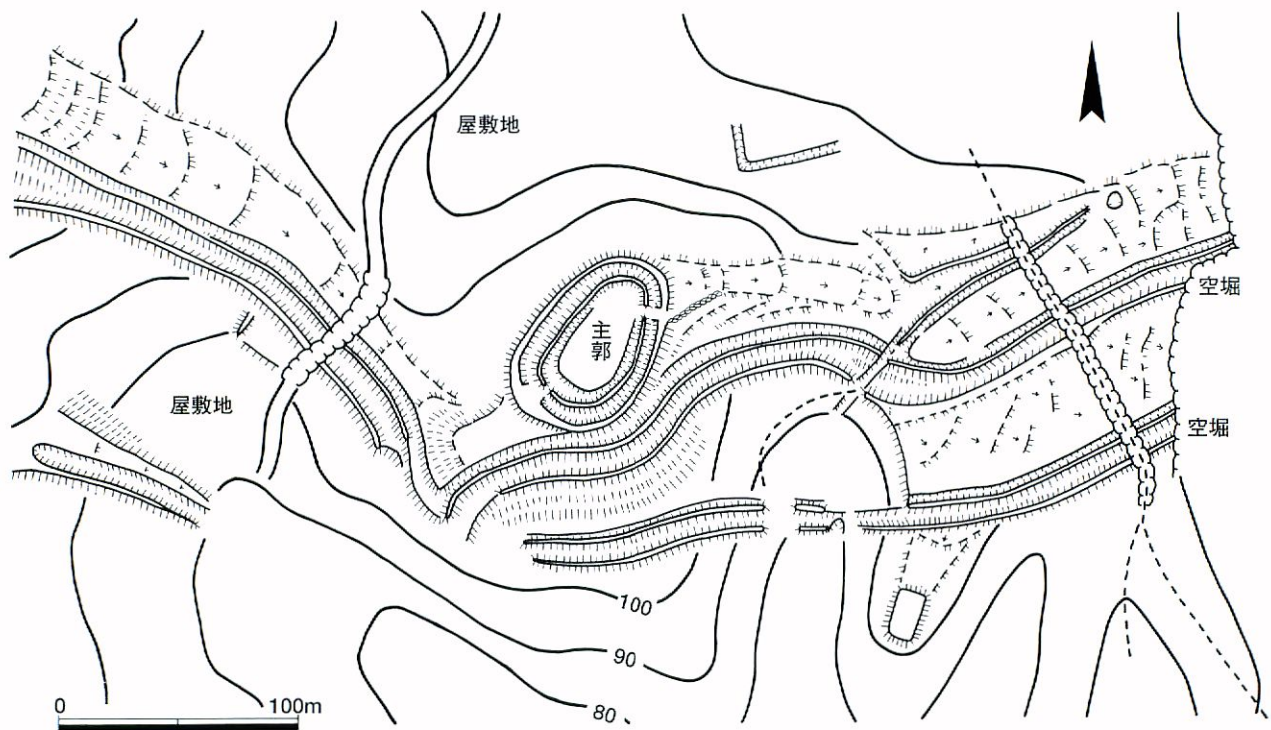
鳥栖市教育委員会



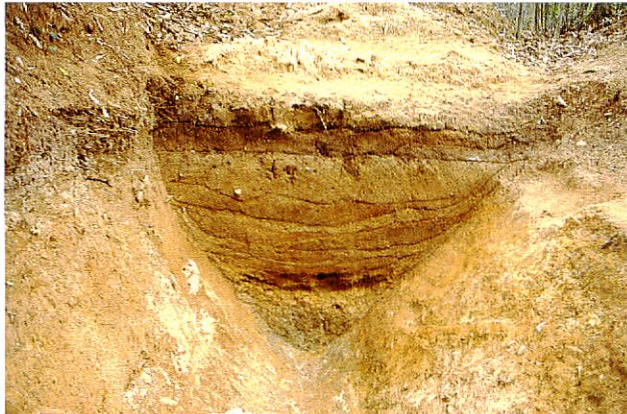
葛籠城空堀

葛籠城は勝尾城下町の谷部の入り口西側、山浦新町集落背後の、標高126m、比高40mの小丘陵上を中心に築かれた日本有数の防塁型城郭ほうらいがたじょうかくです。筑紫氏の家老であった島備後守しまびんごのかみの居城であったともいわれていますが、確かなことはわかっていません。

この城は、戦いになれば勝尾城下町防備の最前線となる位置にあり、おもに堀と土塁とで構成される特異な構造をしています。山上の主郭しゅかく（本丸）は東西約30m、南北約50mの楕円形で、周囲に土塁と横堀どろい ちよこぼりを設けていますが、主郭内部はあまり削平さくへいされてはいません。この主郭を中心に東西に続く稜線の北側を城内として、南側には二重からぼりの空堀と土塁を設け、強力な防御ラインを構成しています。この空堀の規模は、断面がV字形で現在幅約5m、深さ約3～5mですが、埋もれていることを考えればもっと大きなものになると思われます。長さは現在でも500m以上確認されており、当時は四阿屋川あがまやまで延びており、城下である谷を完全に遮断していたものと思われます。



葛籠城縄張図 (千田嘉博氏 作図)



空堀断面



土塁壁面の石積み

葛籠城でも、遺跡の確認調査を行いました。城の中心部ではなく周辺への遺構の広がりを確認するための調査で、主郭の北の谷間では、屋敷地が確認されました。屋敷地は谷を埋めて整地しており、谷からの湧水で当時の建物の柱が腐らずに残っていました。また、城の東側では、空堀の延長が確認され、空堀が城下を遮断していることがほぼ確かめられました。主郭西側の二重の空堀に挟まれた地区では、整然と区画された屋敷跡(曲輪?)が確認され、また空堀や土塁の壁面は石積みであることが明らかになりました。

この地区から出土した陶磁器には、16世紀前半代のものが含まれており、この葛籠城周辺地区は、勝尾城下町の中でも早い段階から利用されていたと思われます。